

インタビューリカバリーサポート・ネットワーク代表・西村直之氏① 「息継ぎ」のないパチンコ 若年者依存の危険性

本日付と来週月曜日付の2回にわたってリカバリーサポート・ネットワーク(RSN)代表理事である西村直之氏へのインタビューを掲載する。

RSNは、沖縄に活動の拠点を置く「ぱちんこ依存問題相談機関」である。平日の毎日、「ぱちんこ依存」の相談を電話で受け付けている。2003年に発足。2006年には第三者機関として設立され、2009年に特定非営利活動法人(NPO)となった。2013年12月には沖縄県で第1号の認定NPOに承認されている。

編集部では、およそ1年に1度、3年連続で、西村氏にお話をうかがっている。その理由は2つある。まず、カジノ導入についての議論の高まりとともにパチンコ業界においても依存問題に対する関心が強まり、RSNへの関心と期待が大きくなってきているためである。パチンコ業界自身はともかく、それを取りまく環境は大きく変化している。依存問題への正しい認識と対策の整備は業界の急務の課題だ。2つめの理由が、西村氏のパチンコ業界向けのまなざしが、パチンコ業界のいわゆる「業界人」とは異なると感じるためである。西村氏は精神科医であり、パチンコ業界を外から「診断する」ことのできる立場にある。また沖縄県という、東京の動きを距離を置いて眺めることのできる場所にもいる。西村氏の見方が、変化の早いパチンコ業界がどこに向かおうとしているのかを見極める、いわば「補助線」を提供してくれると思う。

インタビュー1回目の本稿では、最近の相談件数の推移と、パチンコの中毒性の危険性についての発言をまとめた。明日付の2回目では、パチンコの娯楽としての特徴、そしてRSNの今後の動きについてをまとめていく。

※※※

▼最近の相談件数の推移

編集部…「こころ」2年で、RSNへの相談件数が一気に増加しました。

西村氏… 業界団体のよびかけに応えて、多くのホールがポスターを店内に掲示するようになったことが、大きな効果を挙げました。ポスターを掲示する店舗が増えるたびに、相談件数が増加した、というイメージです。東日本大震災の影響もあつたかと思えます。

ただ昨年の後半あたりから、相談件数は落ち着いてきています。ポスターを掲示する店舗が増加しつつあった時期には、相談件数はその影響を大きく受けていたのですが、最近になってふたたび、稼働率と一致するようになってきたのだと思います。たとえば大雪のあつた2月の相談件数は減少していました。また例年、1月には相談件数が増えるのですが、今年はその中でもなく、どうやらホールの稼働も悪かつたようですね。RSNへの相談者(コーラー)の84%が本人です。そのため、相談件数が稼働率(遊技者数)に影響を受けるのは当然だと思っています。

▼問題化する年齢のピークは「20歳」

編集部… パチンコ業界は、ヘビューザー頼み、依存している人頼みの状態にあると言われていてます。

西村氏… 業界を支えているのは、40歳代から60歳代が中心でしょう。彼らは、出ていた時期、勝っていた時期を知っている世代です。勝っていた記憶が、彼らをホールへと駆り立てています。一方、最初から出ない今の時代に、若い人たちが参入しないというのは当然の帰結です。

こころ最近、2013年の報告書をつくる作業を行っていたのですが、そのなかで表れた興味深いデータのひとつが「問題化した年齢」についてです。本人からの相談件数(初回のみ)を年齢別に並べてみると、18歳から30歳あたりまでが山となり、そのピークは20歳となりました。つまり、

25歳以上だけを見ればパチンコ業界に依存症は「問題化していない」と言うこともできる、衝撃的なデータとなりました。

つまりこれは何を示しているのかと言うと、遊技の経験をそれほど持たない若年層にとって、パチンコの中毒性のリスクは非常に大きくなっているということなのです。若い人たちが使えるお金は、多くありません。わずかな遊技の機会で、いきなり「潰れて」しまっています。パチンコの演出について、前提となる知識を持たずに遊技すると、演出を真剣に受け止めてしまう危険があります。業界の将来にとつても、若年層は「遊び方を知らない」などと言つて、切り捨ててしまつてはいはざありません。

公営ギャンブルには、レースごとに次のレースまでの時間があつたり、また開催日も限られています。冷静になる時間はたつぷりあると言えます。昔のパチンコでは、技術介人性も求められ、玉の補給の際にも、追加投資の際にも、「息継ぎ」をすることができませんでした。機械に、「追いかけてさせられる」というようなことはありませんでした。

いまのパチンコの演出には、昔ののんびりしたパチンコとは違つて、「息継ぎ」がありません。ずっと継続して遊技させようと設計されています。休みを取らず、もう1回、投資するかどうかを、なるべく考えさせないようになっている。脳に直接、刺激を点滴注射しているようなものです。パチンコは「息継ぎのないギャンブル」と言えるでしょう。

演出の効果は経験則によつてのみつくられており、理論的なメカニズムはまだよくわかっていません。中毒性のリスクは、解明されていないままです。

食の安全について最近、表示偽装や毒性物質の混入などがニュースとなつています。ですがパチンコの演出には、安全基準がそもそもまだ存在しない状態なのです。

警察による規制の基準は、「射幸性」となつています。「射幸性」を大当りの確率、つまり大当りするまでに必要な消費金額と考えれば、遊技に必要な金額の制限と理解することが出来ます。大当りの確率そのものを規制するのではなく、むしろ投資金額の制限や管理・監視が、依存問題の抑制にとっては有効だと考えます。若年層を依存問題のリスクから守るため、極論としては、社会的地位や預金の信用がないと持つことのできないクレジットカードでないと打てない、などのように規制すべきではないでしょうか。年代ごとに、リスクの質は異なります。業界は、若年層のリスクの問題に、真剣に向き合う時期に来ています。【月曜付につづく】